

理想自己から捉えた自己形成に関する研究

山田 剛史

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

問題と目的

理想自己 (ideal self) は, Rogers (1959) により「個人が非常にそうありたいと望んでおり, それに最も高い価値をおいている自己概念」と概念的に取り上げられて以来, 数多くの研究が蓄積されてきた。その中心的な研究として, 「理想自己と現実自己とのズレと各種適応指標との関連」を扱った研究があげられる。その後, 1980年代半ばより Higgins (1987) における Self-discrepancy theory の提唱, Moretti & Higgins (1990) や遠藤 (1992) における個性記述的観点の導入, 水間 (1998) や井上 (1999) におけるズレの持つ自己形成的側面に関する検討などによってズレ研究はより精緻化されるに至ったが, そこでの問題点としては, 個々人によって表出された理想自己そのものの持つ意味・文脈や機能的側面についての検討が行われていないということがあげられる。よって本研究では, 個人によって重要とされる理想自己に焦点を当て, それに付与される意味づけを目標研究 (cf: Little, 1983; Emmons, 1986; Cantor et al., 1987) などで用いられている属性評定により測定し, それらと理想自己に対して向かっていこうとする態度 (意欲) と実際に向かっていくという態度 (努力) の 2 側面との関連を検討するとともに, 表出された理想自己の背後に存在する文脈の抽出およびその分類との関連, またそれら理想自己の実現に対して取られる具体的方略およびその希求という観点からの検討をも行う。

研究方法

対象者 大学生 153 名 (男性 61 名, 女性 92 名)。年齢は 18-28 歳 (平均 20.29, SD=1.75)。

調査時期 2001 年 11 月

調査内容 (1-1) 理想自己の抽出 (「こうなりたい」とする正の理想自己を 5 個自由記述) および最重要理想自己の選定 (1 項目), (1-2) 最重要理想自己の選定理由 (選定された理想自己がなぜ重要であるのかを自由記述)。(2) 理想自己に対する属性評定 (各 5 件法): ①対象化, ②重要性, ③困難度, ④実現可能性。(3) 理想自己に対する具体的方略の有無: 「有り」群…具体的方略の自由記述 (最大 5 個), 「無し」群…具体的方略の希求の有無およびその選択理由 (自由記述)。(4) 理想自己に対する態度: 自らの理想に対する実現への意欲 (5 項目) および実際の努力 (4 項目) の程度を測定する目的で, 水間 (2001) の自己形成意識尺度を参考に作成 (各 5 件法)。(5) 自尊感情尺度: Rosenberg (1965) の self-esteem scale を星野 (1970) が訳した自尊感情尺度 10 項目を使用 (各 4 件法)。

結果と考察

1. 重回帰分析による比較・検討

ここでは理想自己に対する態度である意欲と努力の 2 側面を目的変数とし, 理想自己に対する認知的評価を表す属性評定の 4 側面 (対象化, 重要性, 困難度, 実現可能性), と自尊感情の計 5 変数を説明変数として, ステップワイズ法による重回帰分析を行った (TABLE1)。結果, 全体では, 意欲に関して属性評定 4 側面全てが影響を及ぼしており, 努力に関して対象化と実現可能性および自尊感情が影響を及ぼしていた。男性では, 意欲

意欲に関して重要であることが、努力に関して日頃意識することや実現する可能性があることがそれぞれ規定因となっていた。女性では、意欲・努力ともに日頃の意識の程度が最も影響を与えており、また自尊感情にも影響を受けていた。

2. 理想自己の選択理由による属性評定および理想自己に対する態度の検討

ここでは表出された理想自己がなぜ重要であるのかを問い、その分類に基づき理想自己に対する認知的評価および意欲・努力側面に関する検討を行う。分類では8つのタイプに分かれたが、分析に際しては人数の偏りを統制するため10名以上のタイプに属していた「アイデンティティ確立希求型」(自分のアイデンティティを見出すことが出来るからなど)「対人関係向上型」(よい人間関係を築くためなど)「生きがい希求型」(一度しかない人生だから幸せに過ごしたいなど)「価値反映型」(人間として基本であるからなど)の4タイプを対象とした。選択理由の4タイプを独立変数、属性評定4側面と理想自己に対する態度2側面を従属変数とした1要因分散分析(LSD検定)を行った(TABLE2)。これより、理想自己を自らのアイデンティティ確立に関連づけている「アイデンティティ確立希求」群は、理想実現に伴う困難度は高いもののそれに向けて努力するという側面も見出された。一方、同じ努力をするという側面も見出された「価値反映」群は、最も困難度が低く、また高い実現可能性を示していた。そして自らの理想を対人関係の中に帰着させている「対人関係向上」群は、理想の実現は困難で、またその可能性も低いと認知しており、それが直接努力側面の低さと結びついている。また、理想自己の背景に、一度きりの人生をより充実したものにしたいという意識が内在化された「生きがい希求」群は、実現に対する高い困難度と低い実現可能性を有していた。

3. 理想自己の具体的方略による属性評定および理想自己に対する態度の検討

ここでは表出された理想自己を実現するための具体的方略の有無および希求の有無について問い、それに基づき理想自己に対する認知的評価および意欲・努力側面に関する検討を行う。内訳は具体的方略「有り」群(Type1)、具体的方略「無し」方略の希求「有り」群(Type2)、具体的方略「無し」方略の希求「無し」群(Type3)の3タイプを対象とし、これらを独立変数、属性評定4側面および理想自己に対する態度2側面を従属変数とした1要因分散分析(LSD検定)を行った(TABLE3)。これより、概してType1は理想自己に対する属性評定および態度においてType2およびType3に比してポジティブな反応を示していたが、Type2は理想の実現を最も困難であると認知していること、Type3よりも有意に高い意欲を有していることが示された。

TABLE 1 理想自己に対する態度を目的変数とする重回帰分析結果

説明変数	全体		男性		女性	
	意欲	努力	意欲	努力	意欲	努力
対象化	.357***	.556***	.305*	.535***	.429***	.509***
重要性	.326***		.457***		.291**	
実現可能性	.248**	.298***		.447***	.273**	
困難度	.259***		.220*		.200*	-.216*
自尊感情		.178**				.270**
決定係数(R ²)	.481***	.523***	.471***	.651***	.476***	.443***

(数値は標準偏回帰係数) *p<.05 **p<.01 ***p<.001

TABLE 2 理想自己選択理由群による属性評定および理想自己に対する態度の違い

	1(N=14)	2(N=27)	3(N=39)	4(N=30)	F(3,106)	群間差
対象化	4.14(0.66)	3.59(1.01)	3.77(0.90)	3.97(0.93)	1.44	ns
重要性	4.43(0.51)	4.33(0.55)	4.31(0.86)	4.53(0.68)	0.65	ns
困難度	3.64(1.15)	3.89(0.97)	3.69(0.98)	2.97(1.16)	4.28**	1>2>3>4
実現可能性	3.93(0.73)	3.56(0.70)	3.79(0.66)	4.13(0.68)	3.54*	4>2>3
意欲	22.50(2.82)	19.48(3.93)	20.23(4.13)	20.53(3.92)	1.90	ns
努力	15.57(2.28)	12.33(3.11)	13.77(3.63)	14.10(3.26)	3.26*	1>4>2

(*p<.05, **p<.01, 平均の差は05で有意)

TABLE 3 具体的方略群による属性評定および理想自己に対する態度の違い

	Type1(N=70)	Type2(N=51)	Type3(N=31)	F(2,149)	群間差
対象化	4.14(0.73)	3.55(1.01)	3.35(1.11)	10.51***	1>2>3
重要性	4.60(0.55)	4.29(0.67)	4.06(0.85)	7.80**	1>2>3
困難度	3.41(1.14)	3.92(0.91)	3.61(1.09)	3.40*	2>1
実現可能性	4.04(0.71)	3.59(0.80)	3.65(0.80)	6.16**	1>2>3
意欲	21.29(2.85)	19.96(3.21)	17.81(5.43)	9.97***	1>2>3
努力	15.04(2.60)	12.02(3.50)	12.13(3.30)	17.81***	1>2>3

(*p<.05, **p<.01, ***p<.001, 平均の差は05で有意)